

# へき地小規模小学校におけるゴール型授業の事例研究 —バスケットボールにおける状況判断とサポート行動に着目して—

高瀬 淳也<sup>1</sup>, 中島 寿宏<sup>2</sup>

## Case study of goal -type classes in a remote small elementary school —Focusing on situation-assessment and support-action in basketball—

Jyunya Takase<sup>1</sup>, Toshihiro Nakajima<sup>2</sup>

### Abstract

In Hokkaido, approximately 40% of elementary schools are small size and located in remote areas. In such small size schools, it is rather difficult to set group learning styles. Especially in physical education classes, many difficulties could occur in learning ball games competing for score by teams. In the area of physical education science, a lot of studies were conducted in normal size classes. However, there are few practice reports for small size schools in remote areas. The purpose of this study was to verify effects of goal-type physical education classes on learning “situation-assessment” and “support-action” for students in a small size elementary school. As a result, the learning of “situation-assessment” and “support-action” was possible to be learned even in the small size class composed of three students by the ingenuities of teaching materials. In addition, some advantages of small size classes in ease of game reproduction, ensuring discussion time, and instruction for individuals enabled to acquire “situation-assessment” and “support-action” for students. In places near the goals, students tended to be concerned with just own shoots. Therefore, it should be necessary to further ingenuity for the motion around the places. In future, it is necessary to continue to verify the improvement of the performances even in net-type or baseball-type games in small size schools. Such case studies accumulation that target small schools or small classes would be more important.

**Key words** : Education in remote areas, Small size class, Goal-type physical education class

### I. はじめに

中央教育審議会初等中等教育分科会では、2015年に「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引(案)」を公表した。その中で「児童生徒が集団の中で、多様な考えに触れ、認め合い、協力し合い、切磋琢磨することを通じて一人一人の資質や能力を伸ばしていく」

ことが学校の特徴であり、そのためには「一定規模の児童生徒集団が確保されていることが望ましい」と述べている。しかし、現在、我が国では少子化が大きな問題となっており、今後もさらに少子化が進むと予想されている。我が国の学校規模標準は小・中学校ともに「12学級以上18学級以下」とされているが、2013年においては、全国の小・中学校の約半数はこの標準基準に満たない状

1. 北海道鹿追町立上幌内小学校  
〒081-0226 北海道河東郡鹿追町上幌内4線南3-17
2. 北海道科学大学  
〒006-8585 北海道札幌市手稲区前田7条15丁目4-1

1. Kamihoronai Elementary School  
17-3, 4 Sen Minami, Shikaoi, Kato District, Hokkaido 081-0226
2. Hokkaido University of Science  
4-1, Maeda 7-jo 15-cyome, Teine Ward, Sapporo, Hokkaido 006-8585

著者連絡先 高瀬 淳也  
jtakase-syogakko@nexyzbb.ne.jp

況にある（文部科学省，2015a）。特に，北海道では小学校全体の約4割がへき地等指定学校（以降，へき地小規模小学校）と言う状況であり（総務省統計局，2015），さらなる少子化への傾向を考慮すると，へき地小規模小学校や少人数学級を対象にした授業研究は北海道にとって重要であると考えられる。

へき地小規模小学校では，「体育科の球技や音楽科の合唱・合奏のような集団学習の実施に制約が生じる」「班活動やグループ分けに制約が生じる」（文部科学省，2015a）などのデメリットがあるとされている。特に体育授業において，集団対集団で得点を競い合うボール運動系の学習では，立木（1992）や織奥（1993）が指摘するように，少人数のために敵・味方に分かれるチーム編成に難しさがある。また，仮に1チームが2～3人では，チーム内の個々の能力差が大きくなり，「より異質性が高い編成とならざるを得ない」（玉井，2015）状況が考えられる。このことからへき地小規模小学校では，体育授業における人数を確保する試みが行われている。例えば，校内の教職員や地域住民へ授業への参加依頼する試みがある。しかし，日常的に一定の人員確保が難しいため，年間の授業計画や単元計画として構成することができず，イベント的体育に終止している現状がある。また，同一学校において2つ以上の学級が一緒に行う合同体育の試みもあるが，下学年になるほど「学習内容の系統性のない中で学ばなければならないため，大きな負担がかかってくる」（全国へき地教育研究連盟，1998）ことがあり，「学年差や発達段階に伴う体力・体格の違い，運動スキルに大きな差があり，各年齢における体系的，系統的な学習内容を学ぶことに困難が生じる」（黒原，2015）などの課題がある。このような実態にもかかわらず，へき地小規模小学校や少人数学級の体育が対象となった研究は，ベースボール型での実践（高瀬，2015a；高瀬ほか，2014a），ネット型での実践（高瀬・小出，2015b），ICT利用の有効性を報告した中島ほか（2014），高瀬・中島（2014b）など，わずかにとどまっている。

ところで，小学校学習指導要領解説体育編の「ボール運動系」では，ゲームパフォーマンスを高めるために「ボール操作」と「ボールを持たないときの動き」が重要と考えられ，技能はこの2つで構成されている。鬼澤（2010）は，ゲームパフォーマンスを高めるために，「1人のプレイヤーがゲーム中にボールを保持する時間はわずかであることから，空いているスペースへ移動したりスペースを創出したりするボールをもたないときの動きは重要」とし，「ゲーム場面で生じる課題をどのように解決すればよいのかという戦術に関する知識と状況判断の習得も求められる」と述べている。すなわち，ボール運動系の学習においては，ボールを持たない動きと状況判断が重要であり，これをゴール型に当てはめると，パスを受けるポジションへ移動する「サポートの動き」の

習得と，ボールを持ったときに何をどのように行うかという「状況判断」の向上を，授業で目指すべきであると考えられる。昨今のゴール型の研究においてもサポート行動や状況判断に着目したものが増えてきており，児童の接球回数やプレイに従事する時間の確保のため，3対2など少人数のゲームを中心に学習を行っているものも多い（足立ほか，2013；岡田ほか，2013；齊藤ほか，2014）。これらのことから，状況判断やサポート行動の学習では，少人数で行うゲームの教材化が有効であり，少人数学級での応用や実践が可能と考えられる。また，「児童生徒の一人一人に目が届きやすく，きめ細かな指導が行いやすい」（文部科学省，2008a），「ゲーム人数が少なければボールに触れる機会が増加する」（後藤・瀬谷，2010）など，少人数で行う授業のメリットを活かすことで，有効なボール運動の授業が展開できると考えられる。

そこで本研究では，北海道のへき地小規模小学校の体育授業を対象として，少人数学級でも状況判断とサポート行動を学習できるゴール型体育授業を考案し，授業実践を通してその有効性について検証することとした。学習指導要領解説体育編（文部科学省，2008c）において高学年5，6年生のゴール型には，「ボールを保持する人からボールを受けることのできる場所に動いたりして，攻守入り交じったゲームができるようにする」とサポート行動に関する記述があり，その習得が求められていることから，本研究では5・6年のゴール型を研究対象とした。

なお，ゴール型において代表的な教材として考えられるバスケットボールが5対5でゲームが行われることから，バスケットボールのゲームにおいて2チーム編成が難しい10人未満の集団を「少人数」と定義することとした。そのため，人数が10名以下の学級（2学年合わせて編成される複式学級を含む）をここでは少人数学級とした。

## Ⅱ. 方 法

### 1. 期日・対象

2013年10月上旬から下旬にかけて，北海道十勝管内K小学校の5年生男子2名，6年生男子1名の少人数学級にて実施したゴール型の授業を調査対象とした。

### 2. 単元・教材

本研究では，全7時間のゴール型のバスケットボール授業を対象とした。今回は3名の児童<sup>注1)</sup>による，サポート行動の習得や状況判断の向上を目指し，2対1のハーフコート（9m×9m）のアウトナンバーゲームを設定した。東川ほか（2007）は，ゴール型の学習において少人数・アウトナンバー状態で攻防を繰り返すルールを採用したゲームを教材化し，ゲーム中のサポート行動に良好な学習成果が認められたことを報告している。ま

表1 ゲームのルール等

<b>ゲームの人数及びチーム編成</b> 2対1で行う。4プレイごとに守備者を変えて行う。チームは以下のように編成した。 (児童3名を児童R,K,Yとする)																
第1試合 <table border="1"> <tr><td>攻撃</td><td>R・K</td></tr> <tr><td>守備</td><td>Y</td></tr> </table>	攻撃	R・K	守備	Y	⇒	第2試合 <table border="1"> <tr><td>攻撃</td><td>Y・K</td></tr> <tr><td>守備</td><td>R</td></tr> </table>	攻撃	Y・K	守備	R	⇒	第3試合 <table border="1"> <tr><td>攻撃</td><td>R・Y</td></tr> <tr><td>守備</td><td>K</td></tr> </table>	攻撃	R・Y	守備	K
攻撃	R・K															
守備	Y															
攻撃	Y・K															
守備	R															
攻撃	R・Y															
守備	K															
<b>プレイの区切り</b> 攻撃を開始してから、ボールがラインから外に出た時、シュートが決まった(もしくは2回打った)時、守備者にボールを捕られた時、1プレイとして区切る。																
<b>コート及びゴール</b> コートは9m×9mで、体育館に設置されたバスケットゴールを利用した。床からバスケットリングまでの高さは2.55mであった。																
<b>ボール</b> 株式会社 ミカサ社製スマイルバスケットボール 310g (SB-YBL)																
<b>得点</b> シュートが決まれば2点とする。																
<b>ゲームの始め方</b> (攻撃する2名を「攻撃者A」「攻撃者B」、守備する1名を「守備者」とする) ①バスケットゴールに向かって攻撃者A、守備者、攻撃者Bが一直線に並ぶ。攻撃者Aはバスケットゴールの方を向き、守備者と攻撃者Bは攻撃者Aに向かい合う(図1)。 ②守備者からのバウンドパスを攻撃者Aがキャッチしたらプレイ開始。それを機に攻撃者Bは動き出す。攻撃者Bは、左右にしか動くことができない。 ③守備者からパスを受けた攻撃者Aは、攻撃者Bにパスを出すまで移動できない(以降、第1パス)。 ④第1パス以降は、下記のルールに従ってプレイする。																
<b>主なルール</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● ボール保持者は3歩以上歩けない。</li> <li>● バスケットボールのダブルドリブル、トラベリングは授業で指導したが、プレイを止めることはしていない。</li> <li>● 守備において、攻撃者にぶつかったり、たたいたり、押したりしてはいけない。</li> <li>● ゴール下に設けた制限区域内でシュートを打つことができる。ただし、制限区域外でのシュートは認めない。</li> </ul>																

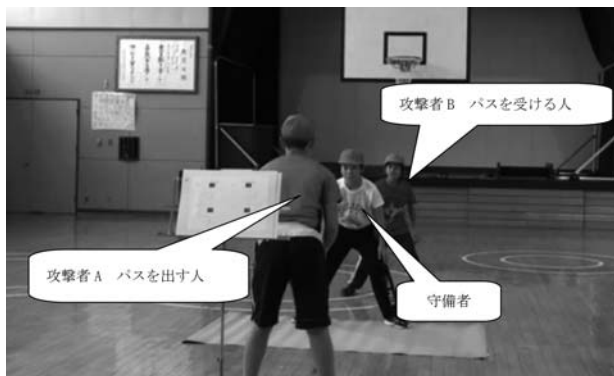


図1 第1パスの攻撃者、守備者の並び方

た、サポート行動とともに状況判断も重視した鬼澤ほか(2008)の研究では、「ゲーム中の状況判断及びボールを持たないときのサポート行動を学習させる上で、アウトナンバーゲームはオープンナンバーゲームと比較して有効であり、教材として適用する意義が十分に認められるものと判断する」とし、2対1や3対2など少人数で行うゲームの有効性について報告している。これらのことから、本研究の対象児童である3名でも実施可能なアウトナンバーとなる2対1でのプレイ場面を設定した。チームは、3名を2名ずつ組み合わせる3チームを編成し、チーム間の得点を競うようにした。ゲームのルール等は、表1及び図1に示した。また、「状況判断を向上させるためには、プレーの選択肢となる技能の習得が必要不可欠」(鬼澤ほか, 2007a)であることから、単元の

はじめにボール操作技能の学習を行った。対象学級の児童は、休み時間にドッジボールなどボールを使って遊ぶことが多く、本単元が始まった時点で、ボールを投げる・捕る技能についてはゲームに支障がない程度の技能を身に付けていた。そこで、ドリブルやシュート技能を中心に1・2時間目は学習を進め、3時間目以降も、準備運動にドリブル、シュート練習を取り入れた。単元構成については、表2に示した。

授業では、「意見や感想を発表できる機会が多くなる」「一人一人の学習状況や学習内容の定着状況を的確に把握でき、補充指導や個別指導を含めたきめ細やかな指導が行いやすい」(文部科学省, 2015a)など少人数学級のメリットを生かすような授業展開とした。各時間は、ボール操作技能の練習を含めた準備運動、全体での課題確認、課題解決に向けた活動(話し合い、試しの運動など)、ゲームを基本の流れとして構成した。なお授業者は40代男性(教職経験年齢17年)である。

### 3. 授業の分析方法

本研究ではサポート行動と状況判断について、ビデオ映像による観察によって評価した。また、ビデオ記録から小林(2000)の分析方法を参考に、授業者の発問、児童の発言を書き起こし、その内容から授業の有効性についての分析を行った。全7時間の単元の内、オリエンテーションが主な内容となる1時間目は分析の対象外とした。

表2 単元構成表

時間	1・2	3・4	5・6	7
目標	・単元の見通しを持ち、ルールやマナーを守ってゲームに取り組もうとする。 ・ボール操作技能を身につけることができる。	・攻撃でパスをつなげたり、守備でパスを防いだりする動き方を工夫する。	・守備者の位置に合わせて、ドリブルかパスかを選択してプレイすることができる。	・ルールやマナーを守り、全力でゲームに取り組もうとする。 ・チームの特徴に合わせて作戦を立てる。
学習活動	オリエンテーション ドリブルやパス、シュートの練習 ゲームの仕方を覚える	パスをつなぐための作戦や防いだりする動き方を考えて練習する。	状況に応じて、パスやドリブル、シュートを選択してゲームができる。	チームで作戦を立てて、練習する。 ゲーム大会
学習の流れ	1準備運動 ・縄跳び、壁あたり、ブリッジ 2ボール操作技能の練習 ・パス練習 止まっている相手にパス～動いている相手にパス ・ドリブル練習 ジグザグ走、目標物に向かってのドリブル ・シュート練習 回数や時間を決めての練習 3ゲームの説明 4メインゲーム 5全体交流 ゲームの改善点、個々の課題を話し合う 6片付け・整理運動	1準備運動 ・縄跳び、壁あたり、ブリッジ ・ボールを持たない動きの練習 ・ボール操作技能の練習 2場の準備 3課題の確認 ・守備の仕方を考えて練習しよう（3時間目） ・パスがつながるように作戦を立ててゲームしよう（4時間目） 4試しの運動 5全体交流 ・作戦を出し合おう（3時間目） ・ボール保持者とゴールの間に入って守備をしよう（4時間目） 6技能練習 全体交流でわかったことを生かして練習する 7メインゲーム 8場の片付け・整理運動	1準備運動 ・縄跳び、壁あたり、ブリッジ ・ボールを持たない動きの練習 ・ボール操作技能の練習 2場の準備 3課題の確認 パスを受けた後の動き方を考えてプレイしよう！ 4試しの運動 5全体交流 守備者の位置に合わせて、パスやドリブルをしよう 6技能練習 全体交流でわかったことを生かして練習する 7メインゲーム 8場の片付け・整理運動	1準備運動 ・縄跳び、壁あたり、ブリッジ ・ボールを持たない動きの練習 ・ボール操作技能の練習 2場の準備 3課題の確認 チームの作戦を立てて、ゲームをしよう 4チーム練習 チームの作戦を実際に試してみる。 5メインゲーム大会 6場の片付け・整理運動
評価規準	関 活動場所の安全を確かめて、準備運動や練習をしようとしている。	思 相手の得点を防ぐよう、守備の動きを工夫している。（3時間目） パスが確実につながるよう、作戦を立てている。（4時間目）	技 守備者の立ち位置に合わせて、ドリブルかパスを選択してプレイできる（5・6時間目）。	・ルールやマナーを守り、互いに声をかけ合ってゲームしている。 自分の技能にあわせて作戦を立てたり、友達と動き方を考えたりする。

### （1）サポート行動の分析

本研究では、サポート行動を中井ほか（2006）、近藤ほか（2008）の報告を参考に「非ボール保持者がパスを受けるポジションへ移動する動き」と定義した。また評価は近藤ほか（2008）に従い、「自ら動き、パスをもらいに行くこと」をAパターン、「自ら動かず自然とパスをもらえる位置にいること」をBパターンとして、授業の最後に行うゲーム（以降、メインゲーム）において、それらの出現回数をカウントした。映像はコート後方から撮影したビデオで撮影し、そのうちメインゲームを観察対象とした。なお、ビデオ機器の不具合により、5時間目の全ゲームは撮影できなかった。また、6時間目もゲームの一部しか撮影できなかったが、撮影できた部分を分析対象とした。

### （2）状況判断の分析

状況判断は、鬼澤ほか（2007a, 2008）を参考に「ボール保持者が、ボールを操作して何を行うかを選択すること」と定義した。そして、ボール保持者がパス・ドリブル・シュートの行動を起こした時、またはボールキープをした時を状況判断の評価場面にした。評価は、岡本（1985）、

鬼澤ほか（2007a, 2008）の研究を参考に状況判断の観察基準表を作成し評価した（図2）。映像はサポート行動の評価で使用した映像と同様ものを使用した。

### （3）映像分析の信頼性

分析の信頼性を確保するために、鬼澤ほか（2007a, 2008）の分析方法を参考に、授業者及び中学校保健体育科の教員免許を持つ2名で、事前分析を行い、サポート場面、状況判断場面ともに80%以上の一致率となるよう観察トレーニングを行った。その結果、2つの場面において80%以上の一致率が得られた。これにより、客観的な分析が一人でも可能であることが確認されたため、最終的な分析は授業者が一人で行った。

## Ⅲ. 結果と考察

### 1. 授業の概要

サポート行動、状況判断の授業は以下のように実施した。

#### （1）サポート行動（3・4時間目）

サポート行動などのボールを持たない動きについて



図2 状況判断の観察基準表

は、森田ほか (2013) が「指導者が『ボールを持たない動き』をどのように指導したらよいか十分に理解できていない」と述べているように、教育現場では未だ課題があると考えられる。対象児童においても、前年度までの授業によって、パスを受けるときは空いている空間に移動するということが理解できているものの、3時間目までのプレイでは有効なサポート行動があまり見られなかった。また、守備者がパスを警戒して非ボール保持者をマークするプレイが多く見られていた。そこで授業では、守備の際、ドリブル突破させないようにボール保持者に正対すること、山なりのパスを出させないように高手をあげることの二点を指導のポイントとした。

この指導によって練習ゲームでは、ボール保持者にパスやドリブルをさせないように接近して守備行動をするようになり、ボール保持者がパスを出せずにボールキープしたままの状態になる場面が増えた。そこで、そのような場面が見られたときに、授業者はゲームを止めて、「この場合 (ボールを持ったままになっている場合)、どうしたらいい?」と3名の児童に発問をするようにした。そして「(非ボール保持者が) もっと右の方に行けばよい。」等、児童に回答させた後、ゲームを再現して回答したプレイがその場面で適正かどうかを確かめさせた。

これを繰り返すことによって、「パスを受けるために、ボール保持者から一定程度離れるとよい」「ボール保持者を呼んで、(パスを受ける) 自分の位置を知らせる」「ボールを持つ人と、パスを受ける人の間に守備がないように」など具体的な動きについての回答が増えてき

た。約10分間、児童同士で教え合ったり、また授業者が助言したりしながら練習を繰り返した (表3参照)。メインゲームでは、パスを受けるためにボール保持者を中心として円を描くように移動するなど、有効なサポート行動が見られるようになった。

## (2) 状況判断 (5・6時間目)

4時間目までのゲームでは、パスを受けると強引にドリブルで制限区域内 (図3参照) まで運ぶ様子が見られたことから、授業者は「パスを受けたあと、ドリブルした方が良いか、パスした方が良いか」と発問し、練習ゲームをしながら3名の児童に考えさせた。練習ゲームでは、1プレイが終わる度に、授業者が「なぜ、パス (またはドリブル) をしたか」を質問し、何を基準にプレイを選択したか振り返らせるようにした。その後、ホワイトボードを使い授業者が指名をしながら状況判断について話し合わせた。その一部を表4に記載した。また、5時間目の板書を図4に示した。

この後、パスを受けたときに守備者が近くいる場面、離れたところにいる場面を設定し練習を行った。また、授業者は制限区域内でパスを受けたときは、シュートも選択肢であることを児童に伝えた。そしてメインゲームを行った。

6時間目においても、5時間目に話し合った内容を振り返り、ボール保持者に守備者が近くにいる場面ともう1名の味方をマークする場面の2場面を設定して練習ゲーム、メインゲームを行った。

表3 4時間目の児童，授業者の会話より（一部抜粋）

攻撃者：Y， R 守備者Kのプレイ終了後（Tは授業者）  
 Y：（パスを出したが，守備者の手に当たり，失敗した場面で）ごめん。  
 R：いいよ。Kがうますぎるよ。  
 R：Kの後ろにいたから，（ゴール方向を指して）もっとこっちに行けばよかった。  
 T：そうだね。それにしても3人とも，ずいぶん固まってプレイしているね。守備をしていて，どうだい。  
 K：守りやすいです。  
 T：今の場面なら，どこあたりでパスをもらうとよさそう？  
 K：もう少し（ボール保持者から）離れたほうがいいと思う

攻撃者：K， R 守備者Yのプレイ終了後  
 R：（パスを出せずにいる場面で，授業者からストップの指示を受けて）K， もっと動いて。  
 K：ごめんなさい。  
 R：もっと，Yのいないところに動いて。たとえば（実際に移動しながら），こことか，こことか。それだったら，パスも出せる。  
 K：はい。俺さ，（ボール保持者の）近すぎないかな。  
 R：そうかも。もう少し離れてもいいかも。

攻撃者：K， Y 守備者Rのプレイ終了後  
 K：Rの守りがすごい（上手）だから，パスって声かけてくれない。  
 Y：そうだね。R， すごいからね  
 K：そうしたら（声をかけてくれたら），パスを出せるかも。  
 Y：次は，右のほうに行くから。  
 K：オッケー。声かけ，頼むよ。

表4 5時間目の児童，授業者の会話より（一部抜粋）

T（授業者）：（第1パスを受けた後，パスかドリブルの）どっちだった？  
 K（児童）：どっちも。  
 T：どういふことが教えて。  
 K：守備が目の前にいたら，ドリブルで進めないから，パスしたらいいと思った。  
 T：もし，守りの人がボールを持っていない人の方だったらどうする。  
 S：ドリブル。  
 T：（Rのほうを向いて）どうして。  
 R：守りの人が近くにいないから，ドリブルできる  
 T：じゃ，今日はどっちだ  
 R：どっちも  
 T：どうやって，（プレイを）選ぶの  
 R：守りの人のいる位置で決める  
 （以降，板書にて守備者の位置でプレイを選択するとよいことを確認。5時間目の板書は図4に示した）



図3 コート図



図4 5時間目板書

## 2. 考察

### (1) サポート行動

4時間目では，サポート行動に問題意識を持たせるために，守備の際の動きを指導することによって，ボール保持者がパスを出しにくい状況を作りだしていた。また授業者も，ボール保持者がパスを出せずにいる場面で，ゲームを止めてサポート行動に目が向くよう発問をしていた。このような手立てによって，授業ではサポート

行動に焦点を当てて進めることができ，児童の話し合いも「どうしたらパスがもらえるか」というサポートの動きを中心に行われていることが分かる。グリフィンほか（1999）が「ゲームのルールを変えることによって、『この状況の中で成功させるためには何を行わなければならないのか』という問題に取り組まざるを得ないような，プレイ条件を浮きださせることができる」と述べているように，本研究では，パスを出しにくい場面をつくるこ

とによって、サポート行動に問題意識を持たせることができていた。そのことで、「どう動いたらよいか」と児童の思考が促されたと考えられる。

また授業の概要からは、3名で話し合った内容について、ゲームを再現しながら適正かどうかを確認したり、その様子を授業者が観察し指導・助言を行ったりしていた。これは、全員が発言したり、ゲームコートを独占して使用したりするなど、時間的・空間的余裕のある少人数学級のメリットを活かした授業展開ができており、学習機会を多く設けることができていた。このようなサポート行動の学習によって、図5のような結果が得られた。2時間目に比べ、3、4時間目はAパターンの増加が見られ、授業の成果がうかがえる。また最終の7時間目のゲームでは、約6割がAパターンと評価できた。

以上のことから、本研究のサポート行動の学習では、プレイにおける児童の思考を引き出したり、パスを受けるための動きの知識や技能を習得させたりすることに有効であったと考えられる。

(2) 状況判断

グリフィンほか(1999)が「技術の行使はゲームパフォーマンスに不可欠であるが、ゲーム場面で『何を行うべきか』を適切に判断する意志決定も同様に重要である」と述べているように、状況判断は非常に重要である。しかし、何を根拠に状況判断をするのかが明確でなければ、児童が適正に状況判断することが難しい。本研究で行った2対1のゲームでは守備者の位置を根拠に行うことが重要と考えて、5～6時間目の授業内容を設定した。

5時間目では、「パスか、ドリブルか」という発問を投げかけることによって、状況判断するための根拠を考えさせ、児童の思考を促すようにした。また、話し合いの場面では、板書しながら守備者とボール保持者の位置関係を把握しやすいようにしていた。話し合いの最後には、「児童の反応の把握とそれへの対応がしやすい」(全国へき地研究連盟, 1998)という少人数学級のメリットを活かし、3名の反応に合わせて発問することによって、「守備者の位置でプレイを選択する」という状況判断の基準を見出すことができていた。

映像分析の結果、図6、図7<sup>注2)</sup>のようにパス、シュー

ト場面においては適正率が右上がりになっている様子が見えがえた。また、図8、図9のようにドリブル、ボールキープ場面では常に9割の適正率であった。

しかし、7時間目においても、ドリブル場面の不適正

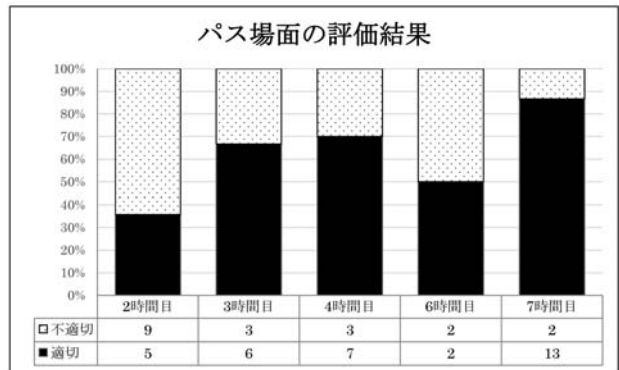


図6 パス場面の評価結果

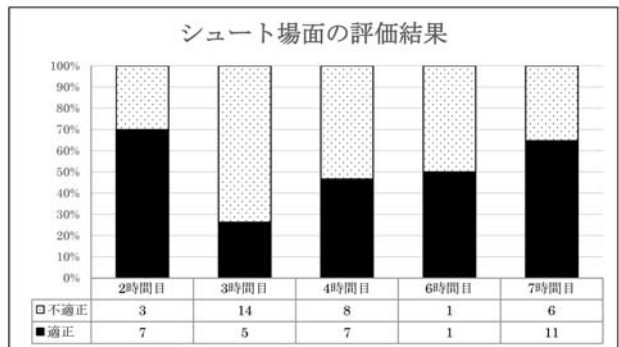


図7 シュート場面の評価結果

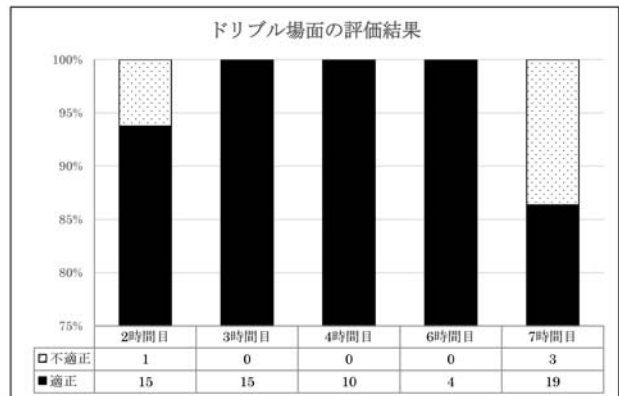


図8 ドリブル場面の評価結果

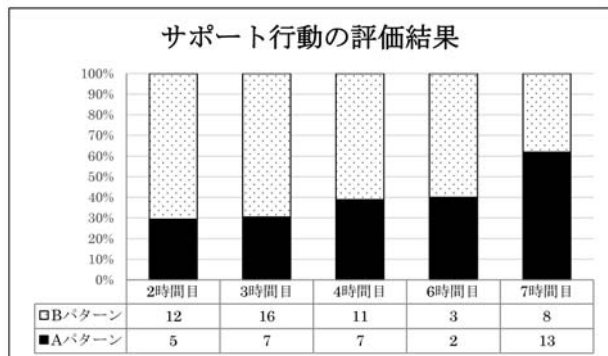


図5 サポート行動の評価結果

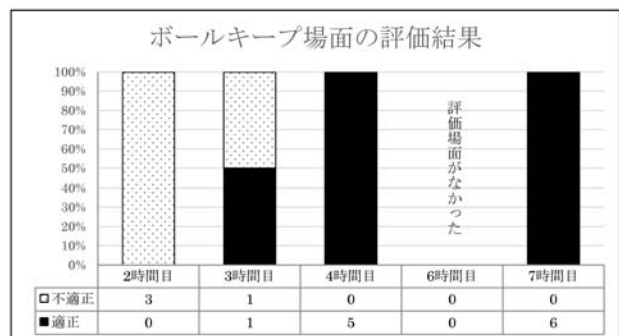


図9 ボールキープ場面の評価結果

と評価するプレイが多く見られた。特に、制限区域内では、強引にドリブルで守備者をかわそうとするプレイが増加していた。授業では、3～4時間目のサポート行動、5～6時間目に状況判断の授業を行っているが、制限区域内の動きに限定した授業内容は設定されていない。これは、サポート行動や状況判断を制限区域の内外どちらでも共通するものとしているからである。また「少人数で一人一人に即した学習指導が容易」（全国へき地研究連盟、1998）であることから、必要に応じて授業者がゲームを止めてその場で指導するように想定した。しかし、児童にとって制限区域内のプレイは、パスやドリブルに加えてシュートの選択肢が増えること、状況判断においても守備者の位置とともにゴールの位置も考慮しなければならないことから、判断が難しくなったと考えられる。また、守備者1名をかわせばノーマーク状態になること、ドリブルで守備者をかわせるようになってきたことなどから、パスに頼らないプレイを選択したと考えられる。授業では数回ゲームを止めて指導を行ったものの、制限区域内のプレイにおいて、状況判断を引きだすという目的の上では有効ではなかったと考えられる。

### (3) 少人数学級の取組

少人数学級では、「望ましい人数のグループやチームが作れない」（全国へき地教育研究連盟、1999）というデメリットがある。そこで、本研究では、2対1のゲームを設定し、一人が2チームに所属する3チーム編成を行い、チーム間で得点を競い合えるように授業を構成した。このことによって、少人数でも攻撃者・守備者に分かれた授業展開ができ、サポート行動や状況判断の学習場面を創り出すことが可能となった。

また、「相互交流の相手が限定されるので、生活経験や学習経験が豊かにならず発展性に乏しい傾向を持つ」（全国へき地教育研究連盟、1998）こともあるが、本研究では、3名の児童で相互に意見を出し合う場面を設定し、そこに授業者が介入し誘導的に発問したことによって、「何を行う必要があるのか」「なぜそれを行うのか」（グリフィン、1999）というサポート行動や状況判断に関する気づき・発見をさせることができ、少人数のデメリットも緩和できたと考えられる。

さらに、1名の児童がボールや場を多く使用できたり、授業者が適宜、個々に技能レベルに合わせて指導助言したりなど、少人数のメリットを活かした授業展開が行われたと考えられる。

一方で、話し合いに広がりを持たせようとするあまり、授業者の介入が過度になり、児童が授業者の発問や指示を待つ場面も見られた。授業者の介入は、児童から意見が出なかったときに行っていたが、「意見が出ないときは先生から質問がある」というように授業者に依存する様子が見られることもあり、意見を広げることと授業者の介入のバランスは課題となった。「少人数学級の問題として、教師のリードが強くなりすぎること、児童生徒

は教師依存になりがちなこと」（全国へき地研究連盟、1998）という報告もあることをふまえ、児童間のコミュニケーション能力の育成も必要と考えられる。

また、3人での学習では、用具やコートを待ち時間なく自由に使える反面、観察の時間を利用した休憩がなく、運動量が多くなり過ぎることもあった。実際、メインゲームの合間には、児童が休憩時間を求めることもあったことから、少人数学級では配慮すべき事項と考えられる。

## IV. まとめ

本研究では、状況判断、サポート行動の習得を目指したへき地小規模小学校のゴール型授業実践において、その効果を検証することを目的とした。その結果、以下について明らかとなった。

- ・3名の少人数学級においても、教材の工夫によって、ゴール型におけるサポート行動や状況判断を習得する授業実践が可能である。
- ・ゲームの再現や話し合い時間の確保、練習時間の確保がしやすい、また授業者が個々の技能レベルに合わせて指導助言ができるなど、少人数のメリットを活かすことによって、適正に状況判断したり、サポート行動したりできるようになった。
- ・ゴール付近においては、得点をねらうあまり、シュートを優先する傾向があった。このことから、ゴール型においては、へき地小規模小学校での限られた児童数を考慮したゴール付近でのプレイ場面のさらなる工夫が必要である。
- ・本研究では、3名の児童による2対1の場面に限定した授業を展開したが、今後は授業者が入った2対2など、1チームの人数のバリエーションを増やしての授業も検討が必要である。

今後はへき地小規模小学校において、ネット型やベースボール型においても、教材や学習内容の工夫によるゲームパフォーマンスの向上を検証していくことが必要である。また、へき地小規模小学校の授業研究の事例を積み重ねていくことも必要と考える。

## 注

注1) 研究対象校では、本研究の前年まで3～6年生で合同体育を中心に行っており、児童3名は同じ教材を使用して学習した。前年度のゴール型の学習では、フラッグフットボールを主教材に、「守備者のいないところ」を目指して移動してパスを受ける技能の習得を学習してきている。本研究のように、パスをはじめドリブルやシュートなどを使った流動的に展開されるゲームは、本単元で初めて学習する。

注2) 図7において2時間目の数値が高いが、これは非ボール保持者への守備行動が多く見られ、ボール保



持者がシュートを打つ場面でノーマークになることが多かったことから、このような結果が出たと考えられる。

## 文 献

- 足立匠・宮崎明世・三木ひろみ (2013) ゴール型に共通するサポートを学習するための教材の効果—中学校におけるバスケットボールとサッカーの授業実践を例に—。スポーツ教育学研究, 32 (2) : 1-14.
- 後藤幸弘・瀬谷圭太 (2010) サポートの動きを学習する「サッカー課題ゲーム」の開発とその有効性の検討。兵庫教育大学研究紀要, 37 : 121-136.
- 東川智之・岩田靖・竹内隆司 (2007) 小学校体育における侵入型ゲームの授業研究—バスケットボールにおける「サポート行動」の学習可能性に関する検討—。信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要『教育実践研究』, 8 : 153-162.
- 石村字佐一・加藤敏弘 (2015) バスケットボール。高橋健夫ほか編, ステップアップ中学体育。大修館書店: 東京, pp.111-132.
- 岩田靖 (2012) 体育教材を創る。大修館書店: 東京, pp.15-37.
- 小林篤 (2000) 体育授業づくりと授業研究。大修館書店: 東京, pp.242-253.
- 近藤智靖・平野宗・鈴木麻友美・藤木雄太・鈴木加奈・出井雄二 (2008) 小学校バスケットボール授業における戦術学習プログラムの有効性の検証。白鷗大学論集, 23 (1) : 107-123.
- 黒原貴仁 (2015) 複式学級におけるゴール型ゲームの授業づくり。体育科教育, 63 (2) : 36-39.
- リンダ・グリフィン, ステファン・ミッチェル, ジュディ・オスリン: 高橋健夫他訳 (1999) ボール運動の指導プログラム。大修館書店: 東京, pp.2-16.
- 文部科学省 (2015a) 公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引~少子化に対応した活力ある学校づくりに向けて~ (案)。http://www.mext.go.jp/b\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/gijiroku/\_icsFiles/afiedfile/2015/01/19/1354538\_6.pdf, (参照日2015年3月21日)。
- 文部科学省 (2015b) 少子化に対応した活力ある学校づくりに関する参考資料。http://www.mext.go.jp/component/a\_menu/education/micro\_detail/\_icsFiles/afiedfile/2015/01/29/1354768\_3.pdf, (参照日2015年3月21日)。
- 文部科学省 (2011) 言語活動の充実に関する指導事例集 (小学校版)。教育出版: 東京, pp.161-168.
- 文部科学省 (2008a) 学校規模によるメリット・デメリット (例)。http://www.mext.go.jp/b\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/038/siryu/08120806/001.htm, (参照日2015年3月21日)。
- 文部科学省 (2008b) 小学校学習指導要領。東京書籍: 東京, pp.92-99.
- 文部科学省 (2008c) 小学校学習指導要領解説体育編。東洋館出版: 東京, pp.13-21.
- 森田勝・吉野聡・加藤敏弘 (2013) ボールを持たないときの動きに焦点をあてたバスケットボールの授業モデル。茨城大学教育学部紀要 (教育科学), 63 : 437-455.
- 中島寿宏・秋野禎見・高瀬淳也 (2014) へき地小規模小学校におけるICT利用による児童の協働性を引き出す体育授業—クラウドコンピューティングを用いた2小学校間での交流実践—。運動とスポーツの科学, 20 (1) : 113-120.
- 中井隆司・宇野伸哉・川島弘美 (2006) 役割分担に基づく戦術的認識を学ぶベースボール型ゲームの実践開発—戦術アプローチに基づく小学校3年生の実践を通して—。奈良教育大学紀要, 55 (1) : 153-164.
- 岡田雄樹・末永祐介・高田大輔・白旗和也・高橋健夫 (2013) ゴール型ボール運動教材としてのスリーサークルボールの有効性の検討—ゲームパフォーマンスの分析を通して—。スポーツ教育学研究, 32 (2) : 31-46.
- 岡本研二 (1985) ボールゲームにおける児童・生徒の状況判断について—攻防「2対1場面」の行動分析—。茨城大学教育学部教育研究所紀要, 17 : 83-91.
- 鬼澤陽子 (2010) ゴール型ゲームの教材づくり・授業づくり。高橋健夫ほか編, 体育科教育学入門。大修館書店: 東京, pp.187-196.
- 鬼澤陽子・小松崎敏・吉永武史・岡出美則・高橋健夫 (2008) 小学校6年生のバスケットボール授業における3対2アウトナンバーゲームと3対3オープンナンバーゲームの比較—ゲーム中の状況判断力及びサポート行動に着目して—。体育学研究, 53 (2) : 439-462.
- 鬼澤陽子・小松崎敏・岡出美則・高橋健夫・齋藤勝史・篠田淳志 (2007a) 小学校高学年のアウトナンバーゲームを取り入れたバスケットボール授業における状況判断力の向上。体育学研究, 52 (3) : 289-302.
- 鬼澤陽子・岡出義則・小松崎敏・高橋健夫 (2007b) アウトナンバーゲームを取り入れたバスケットボール授業における状況判断力の向上—小学校高学年児に対する戦術的知識テスト, 状況判断テストの分析を通して—。スポーツ教育学研究, 26 (2) : 59-74.
- 織奥信男 (1993) 小学校の小規模校における体育授業に関する研究—極小規模校の教科体育経営について—。体育・スポーツ経営学研究, 10 (1) : 57-72.
- 齊藤和彦・山口空子・津田龍佑 (2014) ゴール型教材・バスケットボールにおけるゲームパフォーマンスに関する研究—人数の違いに着目して—。学校教育実践学研究, 20 : 103-108.

- 斉藤和久・岩田靖・宮田貴史（2007）小学校体育における侵入型ゲームの教材づくりとその検討―「トライアングル・シュート」の学習成果の分析―. 信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要『教育実践研究』, 8: 103-112.
- 総務局統計局（2015）第64回日本統計年鑑：平成27年第22章教育：22-3都道府県別小学校. <http://www.stat.go.jp/data/nenkan/zuhyou/y2203000.xls>, (参照日2015年3月21日).
- 高橋健夫（2010）よい体育授業の条件. 高橋健夫・岡出美則・友添秀則・岩田靖編著, 体育科教育学入門. 大修館書店：東京, pp.48-53.
- 高瀬淳也（2015a）複式学級における「協同的プレイ」をめざしたベースボール型の実践. 体育科教育, 63(2): 26-30.
- 高瀬淳也・小出高義（2015b）へき地小規模校の体育授業におけるネット型の事例研究. 北海道教育大学学校・地域教育研究支援センターへき地教育研究支援部門へき地教育研究, 69: 25-30.
- 高瀬淳也・森田憲輝・中島寿宏（2014a）へき地小規模小学校におけるベースボール型授業の事例研究. 北海道体育学会, 49: 13-19.
- 高瀬淳也・中島寿宏（2014b）へき地小規模小学校におけるICTを活用した体育授業の実践-交流の広がりを目指した授業事例から. 教材学研究, 25: 231-238.
- 玉井康之（2015）“教育の原点”としての小規模校の特性とチーム力の活かし方. 体育科教育, 63(2): 10-13.
- 立木正（1992）東京都区内の小規模学校における小学校体育の現状と課題. 東京学芸大学紀要5部門, 7: 149-157.
- 全国へき地教育研究連盟（1998）学習指導方法の工夫・改善～へき地・小規模・複式学級を有する学校の実践的事例～：東京, pp.15-17, 145-146.
- 全国へき地教育研究連盟（1999）効率的な学習指導と学校・学級経営～へき地・小規模・複式学級を有する学校の実践的事例～：東京, pp.36-37.

〔平成27年3月31日 受付〕  
〔平成27年7月29日 受理〕